

【ふりかえり会議対象事業名】 青少年健全育成協働・連携促進事業
 【事業担当セクション名】 青少年育成室
 【ふりかえり会議実施日時】 平成17年3月24日 午後1時30分～
 【ふりかえり会議実施場所】 アスト津

記入者名	橋本真一	石山佳秀
所属	青少年育成室	三重にフリースクールを作る会
完了期		
I 事業の結果		
1. 問題発生時の体制	はい	はい
2. クレームの吸い上げとフィードバック	はい	はい
3. 事業実施後の振り返り	はい	?
<結果>	事業実施結果報告書を提出していただいたときに話をしました。	今回の話し合いが、それに相当すると考えます。
4. 成果の達成	はい	はい
<成果>	当初の協働事業提案のあった事業を実施してもらったと思います。	不登校の子どもにもフィットする学びのかたちの確認と不登校に関わる大人の心理サポートにフィットする方法（当事者を支えたフォーラム）の明確化、子どもと大人を同時進行的相乗的にサポートする方法論の提示
5. 事業の将来展望	はい	?
<課題解決のための改善提案>	今回のこの事業は、単年度で終了しますが、事業実績報告結果書には、青少年健全育成に対する成果・影響・県等に対する政策提言などを記載してもらえるようになっていきます。	今回の話し合いが、それに相当すると考えます。
I 事業の結果で「はい」と答えた数	5	3
II 事業の成果		
1. 事業後の受益者とのコミュニケーションと満足度	はい	はい
<受益者の満足の声>	今後の事業につながる良好な関係づくりができました。	フォーラムアンケート「実際に不登校を体験された本人の話が聞けるというのは本当にありがたいです。まわりの大人が何を言っても、当事者本人を信じて理解することが間違っていないのだと言うことがよくわかり、「心配いらんだよ」という思いがわいてきました。子ども畑講座「みんなでつくった野菜は愛情たっぷり、お料理が美味しくて食べられました。」
2. 事業後の資源提供者とのコミュニケーションと満足度	はい	いいえ
<資源提供者の満足の声>	この事業については、ホームページ等で情報を提供することとなっています。	
3. 人々の自立性の向上	はい	いいえ
4. 新たなネットワーク	はい	はい
5. 地域や社会に与えたインパクト	はい	はい
<事業が地域や社会に与えた影響>	この事業により青少年健全育成に寄与したと思います。	不登校についての思いこみや誤解をとりのぞき、不登校に悩んでいる大人たちを勇気づけることができた。不登校の子どもが健やかに育ち、学んでいくための良いモデルを提示することができた。
II 事業の成果で「はい」と答えた数	5	2
III 実施の結果		
1. 協働意識の醸成	はい	はい
2. 協働の満足度	はい	はい
3. 協働のコストの分担	はい	?
<生じた負担感>		
4. 今後の協働の改善	はい	はい
<改善ポイント>		中間報告会での話し合いが大変参考になった。、事前にもこのような話し合いの場を設けることで、さらにより事業にすることができると考えられる。
5. 結果の公開と説明責任	はい	はい
III 実施の結果で「はい」と答えた数	5	4
完了期で「はい」と答えた数の合計	15	10

2004(平成16)年度 当初予算 基本事業目的評価表

基本事業名	12302家庭、学校、地域の連携による青少年健全育成環境の整備					
評価者	所属	生活部青少年育成チーム	職名	マネージャー	氏名	廣田 恵子
	電話番号	059-222-5986	メール	hirotk01@pref.mie.jp		
評価年月日	2004年1月30日					

政策・事業体系上の位置づけ	政策:	豊かな個性を育む人づくりの推進
	施策:	123 青少年の健全育成
	施策の数値目標:	青少年の社会活動・地域活動体験率

基本事業の目的	【誰、何が(対象)】	家庭、学校、地域が
	【抱えている課題やニーズは】	青少年にさまざまな社会体験や自然体験等の機会を提供することにより、規範意識や協調性を身につけて成長していくことが求められている
	という状態を	
	【どのような状態になることを狙っているのか(意図)】	多様な青少年育成活動を連携しながら自主的・主体的に実施している
	という状態にします。	
	その結果、どのような成果を実現したいのか(結果＝施策の目的)	青少年が自立性や社会性を身につけている

基本事業の数値目標、コスト、マネジメント参考指標

		2001	2002	2003	2004	2006
青少年の体験・交流活動のための環境づくりに取り組む住民組織数(組織) [目標指標]	目標			170	191	215
	実績		169	172		
必要概算コスト(千円)					47,747	0
予算額等(千円)					31,166	
概算人件費(千円)					16,581	0
所要時間(時間)					3,920	
人件費単価(千円/時間)		4.21	4.30	4.23	4.23	
必要概算コスト対前年度(千円)						-47,747
訪問市町村数(市町村) [マネジメント参考指標]	目標		69	30	30	
	実績		9	10		
協力市町村(市町村) [マネジメント参考指標]	目標		69	69	40	
	実績		29	35		

[マネジメント参考指標]		
[マネジメント参考指標]		
[マネジメント参考指標]		
[マネジメント参考指標]		

数値目標に関する説明・留意事項
 各地域において、青少年が体験・交流活動を行う環境づくりに取り組んでいる、住民メンバーで構成された健全育成組織(推進委員会等)やNPOなど活動団体の数。2006年度までに50組織程度増やす目標としました。

	種類	マネジメント参考指標	困難度	
2004年度 マネジメント 参考指標	1	事業量	訪問市町村数	十分達成可能な目標
	2	協働度	協力市町村	十分達成可能な目標
	3			
	4			
	5			
	6			

<参考>マネジメント参考指標の種類
 事業量(必置)＝主要な活動に関する参考指標(アウトプットなど)
 協働度(必置)＝対象者や他団体等との連携・協働に関する参考指標(意見反映件数等)
 比較(任意)＝他団体等との比較に関する参考指標(全国順位など)
 副次的(任意)＝間接的・副次的な効果や成果に関する参考指標(アウトカムなど)

2004年度マネジメント参考指標に関する説明・留意事項
 「地域のこどもは地域で育てる」気運を醸成するため、地域(市町村等)の理解が必要であり、事業の趣旨が伝わるよう、地域(市町村)を訪問して対話することにより事業実施が円滑にすすむようにします。

基本事業の評価

2003年度の取組内容
成果の達成見込み
 概ね順調
 これまでの取組内容と成果(見込み)、成果を得られた要因と考えられること
 青少年が地域等で身近に参加できる直接体験の機会等を青少年に提供し、地域社会等での関わり・体験を積み重ねることに対して支援をしています。中学生の職場体験事業については、事業の趣旨が各地域で認識されるようになってきたことにより、親の苦勞が実感できた、中学生を見直した、家庭での会話が増えた等の成果が出てきており、実施校数も増えています。また、地域の実情に応じ、地域の関係者やNPO等が推進組織を設置し、地域住民が自ら考え、自ら実行する青少年の居場所づくりや多様な体験機会を提供する取組が県内各地で年間を通じて行われています。
 家庭の教育力や地域の教育力が低下しているなかで、青少年が地域の大人との関わりを通じて規範意識や社会性を身につけて成長することにつながっています。
翌年度以降に残る(見込みの)課題、その要因と考えられること
 中学生の職場体験事業については、実施校数を増やすことが課題です。そのため、未実施の市町村や各地域の中学校を訪問し、より多くの市町村や中学校などに事業の趣旨を理解してもらうことが必要です。また、地域住民が地域で青少年の育成を主体的に考え、実行する体制・組織づくりや活動をすすめていくことが必要ですが、この事業についても、事業の趣旨や内容を広く理解してもらうことが課題です。なお、これまでの取り組みは、大人が準備した体験機会への参加が小学生期までに止まってしまうがちであったため、中高生の世代の青少年が自分たちで企画・運営する事業を地域に広げることが課題です。

基本事業の展開

2004年度 施策から見	基本事業間の戦略での位置づけ	
	注力	総括マネージャーの方針・指示
	→	地域主体の取組の推進と評価による新たな展開の検討

たこの基本事業の取組方向	<p><参考>注力:取組への思い入れや経営資源投入など施策の中での力の入れ具合</p> <p>↑＝相対的に力を入れて取り組んでいく</p> <p>→＝従来どおりの力の入れ具合で取り組んでいく</p> <p>↓＝相対的に力の入れ具合を抑えていく</p>
2004年度の取組方向	<p>中学生を対象に、家庭、学校、地域社会が一丸となって、地域ぐるみで職場体験活動を実施することで、「地域の子どもは地域で育てる」という気運の醸成を図るため実施校を拡大します。また、家庭、地域、学校、NPO等の連携・協働による、地域が主体となって、自ら考え実施する青少年育成活動・体制整備を引き続き支援します。さらに、青少年が、地域社会の構成員の一員であることの自覚を高めていくことを目的として、中高生の世代の青少年が、気軽に立ち寄り、自由に集まることのできる居場所を設け、青少年が自ら企画・運営する事業を支援する青少年居場所づくり事業にも引き続き取り組みます。これらの事業は、地域において子どもたちが社会規範やルールを身につける機会を提供することにつながります。</p>
総合行政の視点からの取組	<p>中学生の職場体験活動を進めるにあたっては、事業の運営などに各方面から助言を得て実施します。また、家庭、地域、学校、NPO等の連携・協働による地域が主体となって地域が自ら考え実施する取り組みについては教育委員会と連携しながら取り組みます。青少年の居場所活動については、公民館等の居場所及び青少年の企画や事業の運営をサポートする役割を担う者が必要であるので、市町村や教育委員会等と連携して事業をすすめます。</p>

2004年度 構成する事務事業間の戦略(注力) (要求額:千円、所要時間:時間)

事務事業名	要求額	対前年	所要時間	対前年	注力	貢献度合	効果発現時期
	事業概要				マネージャーの方針・指示		
A 青少年育成推進活動補助金	7,833	-203	500	-550	↑	直接的	中期的
	(社)三重県青少年育成県民会議(平成16年4月1日からは、(財)三重県児童健全育成事業団と統合し、新しく財団法人となる予定)の活動に対して補助し、青少年育成県民運動の普及促進を図り、県内の青少年健全育成を推進する。				統合を契機に、現在の県民会議をステップアップした新しい団体としてスタートし、市町村会議に対して情報提供、人材育成、財政支援により特化する。		
B 地域青少年ふれあい環境づくり県民運動事業	6,400	-600	600	0	→	直接的	中期的
	家庭・学校・地域住民による、地域主体の青少年健全育成体制づくりとその活動を支援する。				「地域の子どもは地域で育てる」という考え方を基本に、地域の実情に応じた新しい取り組みを展開する。		
C 青少年健全育成協働・連携促進事業	2,241	-999	720	-30	→	間接的	中期的
	行政・団体等が広く協働できる環境を整備し、地域における青少年の健全育成活動を促進するため、青少年の育成活動を行う団体等に事業の企画案を公募し、選定のうえ委託実施するなど、青少年健全育成に取り組む連携・協働体制を充実する。				委託実施する団体とは、青少年育成チームのパートナーとして協働連携して事業をすすめる。		
D 自分発見!中学生・地域ふれあい事業	10,192	-1,508	700	-1,200	→	直接的	中期的
	地域ぐるみで中学生の職場体験活動を実施することで、生徒の「生きる力」を育むとともに、地域社会における「地域の子どもは地域で育てる」という気運を高める。				受け入れ企業に事業の趣旨が伝わるようPRに努め、参加校の増加につなげる。		
E 青少年居場所づくり事業	4,500	-500	1,400	-600	→	直接的	中期的
	中高校生世代の青少年が、気楽に立ち寄り、自由に集まることが出来る居場所を設け、そこに集まる青少年が自ら事業を企画・運営する過程を通じて、自立心や社会規範を身につけることができるよう支援を行う。				居場所づくり事業の目的・意義が県域に伝わるようPRに努める。		

<参考> 貢献度合: 直接的＝基本事業の目的達成などに直接関連・影響する
 間接的＝基本事業の目的達成などへの関連・影響の度合が副次的で、相対的に低い
 考慮外＝基本事業の成果への関連・影響の度合が副次的で、相対的に低い

<参考> 効果発現時期: 即効性＝基本事業の目的達成などに2年以下で効果を出す
 中期的＝基本事業の目的達成などに概ね3年～5年で効果を出す
 長期的＝基本事業の目的達成などに概ね6年以上で効果を出す

休廃止する事務事業	事務事業名	理由	2003年度予算額(千円)	2003年度所要時間(時間)
	青年海外交流派遣交流事業	効果の検証により廃止	6,837	500

平成 17 年 2 月 25 日

平成 16 年度三重県青少年健全育成協働・連携促進事業 実施結果報告書

三重県生活部青少年育成室長 様

平成 16 年 6 月 8 日付けで委託契約を締結しましたこのことについて、実施結果は下記のとおりです。

住 所 三重県津市広明町 328 津ビル 1F

団体名 NPO 法人 三重にフリースクールを作る会

代表者職・氏名 理事長 石山 佳秀



1 テーマ名	不登校の子どもの学びの支援と不登校に関する大人のための心理的サポート	
2 事業内容	不登校の子供にフリースクール体験学習を中心とした学びの場の提供と不登校に関する大人のための心理的援助の多様を提供	
事業概要	<p>① 不登校の子供にフリースクールの学習(体験学習、創作活動、社会的活動)を 実践し、不登校の子供に学ぶことの喜びを知らしめ、主体的に生きる力を獲得する ことを目指す。</p> <p>② 不登校に関する大人(保護者、教育関係者)を対象とした教育講演会、グループ学習の 場、相談機関を提供し、不登校に対する不安の解消、不登校の理解、より実践的 な不登校の子供への望ましい関わり方の獲得を目指す。</p> <p>② が実現され、子供を取り巻く環境が整えば、不登校の子供の健やかな 成長と学びが、より効果を発揮し、相乗的に、子供・大人が生き生きとした状況が 改善されていく。</p>	
契約金額	1,000,000	円
主な事業参加者	三重にフリースクールを作る会 役員 フリースクール三重インレス97 6~19歳の子供(不登校)	不登校に関する大人(保護者、教育関係者) 一般から募集した講師 講演会、勉強会講師
事業実施地域 (複数の市町村)	三重県全域対象	実施地域 津市・四日市市
実施期間	平成 16 年 6 月 1 日 ~ 平成 17 年 1 月 31 日	

3 事業実施状況 ※ 添付した「報告書」にまとめられています。(不登校の子どものための支援)

月 日	具体的な活動内容	主な活動場所	主な協力者又は参加者
2004年 8月～ 2005年 1月	パソコン講座(全10回) ・子どものためのパソコン講座 (自作パソコンの作成など) ・子どもがアシスタントをするパソコン講座 (社会的活動の実践)	フリースクール 三重シュレ	・講師 千々岩 研 代理 辻 忠雄 ・不登校の子 ^{9人} 26名
2004年 6月～ 2005年 1月	音楽講座(全18回) ・様々な楽器を体験する。 特に、クラム、チェロ、ピアノ)	・アスト津 スタジオ ・フリースクール三重シュレ	・講師 中西りえ子 久保由香利 ・桐原了 田口薫 ・不登校の子 ^{9人} 38名
2004年 6月～ 2005年 1月	畑講座(全20回) ・耕すところから、収穫までを体験する ・収穫した野菜を料理する	フリースクール 三重シュレ 大畑	・講師 辻 忠雄 ・不登校の子 ^{9人} 50名
2004年 6月～ 2005年 1月	個別学習(子どもがやりたい時に) ・子どものニーズに合わせて、教科的学習を行う。 国語、社会、数学、理科、英語、家庭科	フリースクール 三重シュレ	講師 石山 恒秀 (アドバイザー) 辻 忠雄 桐原了 久保 由香利 千々岩 研 不登校 山本 浩二 子 ^{9人} 竹島 恵美子 子 ^{9人} 伊藤 泰代 16名
2004年 6月～ 2005年 1月	パソコンを使った創作活動 (子どもが主体的に活動、 講師は補助的役割) ・ゲーム作り ・作曲 ・イラスト ・写真の合成	フリースクール 三重シュレ	講師 辻 忠雄 千々岩 研 ・不登校の子 ^{9人} 6名
2005年 2月～	三重シュレ内に畳の間に 木工講座	フリースクール 三重シュレ	講師 千々岩 研 ・不登校の子 ^{9人} 5名

※ 事業実施状況がわかる写真、パンフレットなどを添付してください。

3 事業実施状況 ※添付した「報告書」にまとめられています。(不登校に関する大人への心理的サポート)

月 日	具体的な活動内容	主な活動場所	主な協力者又は参加者
2004年 8月7日 (土)	教育講演会「学校に行く行かない…誰が決める?」 アトラー心理学から不登校を考える。 講演と質疑応答。	四日市本町プラザ	講師 岸見一郎氏 後援 三重県教育委員会 参加者 不登校に関する大人 13名
2004年 8月28日(土) 8月29日(日)	集団心理療法サイコドラマ 「子どもと望ましい関係を探してみませんか?」 ～TAサイコドラマの招待～ ・サイコドラマを用いて、不登校の子どもの関わり方を体験的に学習する。	アスト津会議室	リレク 深山高男氏 後援 三重県教育委員会 参加者 不登校に関する大人 関係者 28名
2005年 1月10日(月)	不登校フォーラム 当事者が語り 当事者と語り 「心配しないで 不登校」 ・不登校・引きこもりを経験した当事者による講演・ 質疑応答・懇談会	アスト津4F ホール	講師 渡辺広史氏 主催 三重県教育委員会 企画・協力 三重ヒールズ 制作会 参加者 不登校に関する大人 当事者 約200名
2004年 6月～ 2005年 1月	不登校相談「親サロン」(全13回) ・月に2回開催。予約・料金不要の 気軽に参加できるタイプのサロンをひく。 ・不登校について悩んでいる大人たちが集まり、 話し合うことで安心感をもってもらう。	フリースクール 三重ジュレ	担当 外川保子 フリースクール 三重ジュレ の保護者の方 不登校について悩んでいる 保護者 nベ 49名
2004年 6月～ 2005年 1月	不登校学習会(全8回) ・不登校の子どものいる親同士で話し合い、 アトラー心理学をベースに、子どもとの関わり方 を考える。	四日市本町プラザ内 女性センター 会議室	担当 田口薫 不登校の子どものいる 保護者 nベ 29名

※ 事業実施状況がわかる写真、パンフレットなどを添付してください。

5 事業実施結果

(1) 今回の事業実施による、青少年健全育成に対する成果・影響 (県等に対する政策提言など)

当会が提案したこの事業は、「不登校の子どもの学びの支援」と「不登校に関する大人のための心理的サポート」の二本柱であった。不登校に悩んでいるのは子どもだけでなく、それに関わっている大人も不安を抱えている。大人が不安が、子どもとともに生活していくうちに、言葉の節々で行為に出てくるのは当然であり、それが子どもにプレッシャーを与えている。いかに不登校の子どものためにサポートの場を設けても、それに関わっている大人が不安を抱いているのであれば、子どもは安心して過ごせない。不登校の子どもの健全に育ち、学習を進めていくには、大人がサポートが必要なのである。「不登校の子どもの学びの支援」では、体験学習を中心としたプログラムが準備された。すなわち、体験学習が不登校の子どものためにサポートの場が再確認できた。さらに、講師を一般から募集することにより、型にはまらない学習方法を実践できた。講師と子どもが、心を通い合わせる講座を開催できたことがよかったと思う。湯まもろ学習方法よりも、講師と触れ合いながら、体験的に学習していくというスタイルである。講師の方々にとっても、不登校についての思い込み(「不登校の子はみんな内気だ」とか「不登校の子は、学校に行けずにかたがた」など)を払拭するよい機会にしていたらと思う。

「不登校に関する大人のための心理的サポート」では、教育講演会(心理学)、集団心理療法、不登校相談(親の会)、不登校学習会が準備されていた。教育講演会と集団心理療法は、不登校について心理学的なアプローチをするという内容であったが、あまりにも参加者が少ない結果となった。不登校に関する大人が求めていることはもっと違ったことであるということは明らかであった。「三重県生活部」と残りの企画について再度検討し、予定していた冬の心理学企画を、「当身者が語る、当事者と語る、教育フォーラム」に変更した。結果は大盛況であった。(会場は定員の200名で埋まり、「質疑応答」「懇談会」まで大勢の方が参加された。内容に関しては、アンケートから「96%」が「よかった」と回答する大変満足度の高い企画であった。参加者も「親」「教師」を中心とした。ねらい通りとなった。)これにより大人たちが求めているのは「心理学的アプローチ」ではなく、「当身者の声」ということが明確になった。さらに「三重県教育委員会」とも相談を重ね、この企画は、「県教育委員会主催・協力団体」として当会が企画」という画期的な形となった。協働事業のパートナーとして初めて「三重県教育委員会」と共に教育フォーラムを実施することができたのである。当事業の中で新しい連携の形を提示できたことも、大きな成果の一つであった。

当事業において、不登校の子どもの主体的に生きていくためのプログラムのモデルを提示できたことは、成功であった。不登校に関する大人が安心できるように「当身者の声」と届け、不登校の子どもの安心して育っていく環境を作り、

(2) 今後の活動計画 子どもにサポートの学びを提供していくという方針である。フォーラムの感想でも今のようになって思うと、知らないうちに子どもにプレッシャーを与えていたような気がする。私が子どもの邪魔をしていたのかも知れない、といった感想をいただいた。大人が心理状態が及ぼす子どもの成長への影響力に気づいただけでも、大きな前進なのである。

事業を進めていくうちに、当初予定していたことが起った。そこから多くのことを学び、さらにモデルを洗練させた。当会の目指す方向も明確にすることができた。子どもが主体的に生きていく力を実際に獲得していくには、短期的に企画を行うのではなく、事業を継続していく必要がある。単発で終わってしまうのでは力が発揮できないので、この事業が生かされていくように、行政の方々と連携を、これからも続けていく必要性を感じている。

今回の事業が有意義なものになったのは、結果の反省を踏まえて「生活部」との連絡を取り合いながら、試行錯誤できたことが大きな要因である。「中間報告会」での話し合い、アドバイスも、とても勉強になった。

5 事業実施結果

- (1) 今回の事業実施による、青少年健全育成に対する成果・影響（県等に対する政策提言など）
（青少年の育成にとってどのような具体的な効果があったかを記載してください。）

(2) 今後の活動計画

2005年夏に、教育委員会との協働で開催する「当事者による講演会・懇談会」を予定している。
「当事者の声」を届けることで、不登校に関する大人に安心してもらい、今まで気付かなかった視点で不登校をとらえるチャンスを提供するのが目的である。
子どもの学びの支援は、これまでとおり、体験学習を中心としたものを提供していく。
子どもから将来の仕事につながるようなことをしたいという要望も出てきている。
すでに「老人介護施設テイクス」との連携が始まっている。
職業体験も子どもの要望に応じて組み入れていく予定である。